

景観建築を誕生させたF・L・オルムステッド（1822—1903）

広大なセントラルパーク

ニューヨークのマンハッタンにあるセントラルパークと東京の都心にある日比谷公園は対比されることがあります。どちらも巨大都市の中心にある公園という意味では類似していますが、前者は四〇〇〇メートル×八〇〇メートルで面積三四〇ヘクタール、後者は五〇〇メートル×三〇〇メートルで一六ヘクタールと二〇倍も相違しています。完成も一八五九年と一九〇三年で四〇年近い差異がありますが、それ以上に内容が相違しています。

日比谷公園は一部に和風庭園もありますが、大半は広場を中心とした空地で、建物も図書館、公会堂、料理店くらいしかありません。セントラルパークの大半は人工の森林で、鳥類が遊泳している湖沼やアイススケートリンクなどの運動施設もあります。さらにメトロポリタン・ミュージアムを筆頭にいくつかの博物館や美術館もあります。このアメリカで最初の都市公園を設計したフレデリック・ロー・オルムステッドを紹介します。

農業から記者に転身

オルムステッドは一八二二年にコネチカット州ハートフォードの裕福な商人の家庭の長男として誕生しました。オルムステッドの祖先は一七世紀の初期にイギリスのエセックスから移住してきた由緒ある一族でした。オルムステッド本人はイエール大学へ入学を希望していました。しかし、その時期に病気で視力が低下したため入学を断念し、見習い船員、商人、貿易など様々な仕事に就業しますが、農業を本業にしようとは決心しません。

そこでイエール大学に入学して農業を勉強して卒業し、一八四七年からはマンハッタンの南側にあるスタテン・アイランドに父親がオルムステッドのために購入してく

れた五〇ヘクタールもある広大な農地で農場を経営していました。その場所をオルムステッドは「トソモック農場」と命名して一八六六年まで経営しており、その住居も保存されています。後年、オルムステッドが景観建築の元祖となる背景は、ここでの経験にあります。

しかし、その時期にオルムステッドは転身を開始します。一八六一年に勃発するアメリカの南北戦争は奴隷制度の賛否を背景とする内戦ですが、すでに五〇年代から気配はありました。奴隷制度に反対のオルムステッドは五二年から五七年にかけて南部を旅行して実態を見聞した経験を『ニューヨーク・デイリー・タイムズ（現在のニューヨーク・タイムズ）』に「テキサス旅行」など何本かの記事として掲載し、奴隷制度に反対の意見を表明します。

その経験を評価され、一八五五年から五七年までは『パットナムズ・マガジン』という雑誌の編集長に就任、六五年には『ザ・ネーション』という雑誌を共同で創刊します。このような経験を背景にして、次第に本業となる景観建築や公園設計の方向に転向していきます。五六年にはニューヨークの作家や画家で構成する「センチュリー・アソシエーション」の会員になり、すべてのニューヨーク市民のための公園を提案しています。



図1 バーケンヘッド公園（1847）

それ以前の1850年にはイギリスを旅行して公共公園を視察し、イギリス中部の都市バーケンヘッドにJ・パクストンが設計した「バーケンヘッド公園」に感動します(図1)。パクストンは翌年、イギリスが開催する世界最初の「大博覧会」の会場となる鉄骨とガラスでできた「クリスタルパレス」(図2)を設計した人物です。オルムステッドはイギリスでの印象を「アメリカ農夫のイギリスでの旅行と談話」(1852)として発表しています。

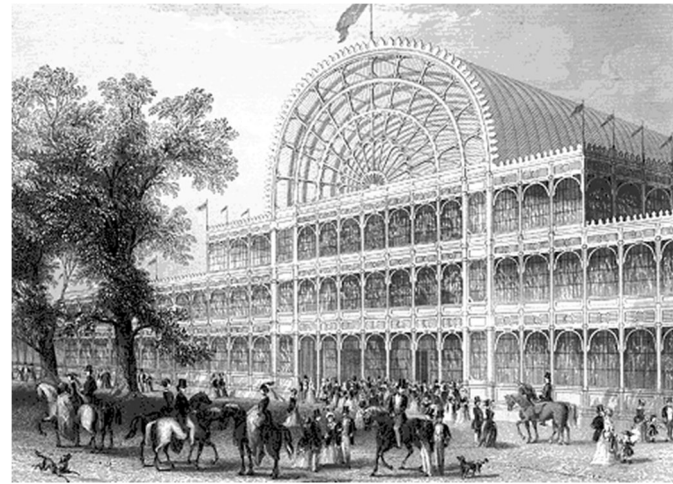


図2 クリスタルパレス (1851)



図3 セントラルパーク (1857)

セントラルパークの成功

ニューヨークのマンハッタンは一七世紀初期にオランダの商人が南端に入植し、ニュー・アムステルダムと名付けていた場所ですが、次第に北側に発展し、一九世紀初期の三〇年間で人口が四倍になるほど増加していきました。それとともに居住環境が悪化してきたため、アメリカの造園作家A・J・ダウニングなどが、ロンドンのハイドパークやパリのブローニュの森林のような市民のための公園が必要だと主張するようになります。

そこで一八五三年にニューヨーク州議会が「セントラルパーク」となる広大な土地を公園用地に指定、五五年までに、すでに居住していた人々に退去してもらい、現在価格に換算すると約二〇〇億円にもなる金額で用地を取得し、五七年に公園計画の公開競技設計を実施します。三三の提案がありました。オルムステッドは公園設計の恩師であるA・J・ダウニングから紹介されたC・ヴォークスと共同で応募、見事に一位に選定されました(図3)。

提案の大半が公園を周囲の街区と融合させるような内容だったが、一位となった二人の提案は公園と周囲を明確に分離した計画でした。当選の決定直後から工事は開始されますが、敷地は岩山と沼地が大半で、南北戦争の激戦ゲティスバーグの戦闘で使用された以上の火薬を使用して岩石を粉砕、植栽に不敵な土壌を大量に除去する一方、適切な客土を搬入して植林し、以後の手本となる公園を実現し、オルムステッドは初代の園長に就任しました。

この都市公園が評価されたのは巨大都市に広大な緑地が出現したという以上の理由があります。建設段階では巨額の工事費用により大量の雇用が発生して失業対策になりました。完成した段階では、養豚農場があった場所が散策のできる緑地になり、水路の開通が大雨対策になり、立体交差道路により馬車に干渉されずに人間が散策できるようになるなどの計画により、周囲の土地の価値が向上し、ニューヨークを象徴する場所になったのです。

アメリカに公園運動が発生

セントラルパークの評判は全米に浸透し、都市公園を建設する「アメリカ公園運動」が発生します。マンハッタンに隣接するブルックリンは煉瓦用採石場跡地を公園にする設計をオルムステッドに依頼します。岩山を公園にする無理な注文でしたが、セントラルパークで大量の客土により植栽を可能にした経験により緑豊かな「プロスペクトパーク」が実現しました(図4)。これらの成功により設計依頼が殺到し、数百の都市公園を実現しています。



図4 プロスペクトパーク (1867)

オルムステッドの設計した公園に共通する特徴は、ヨーロッパの歴史のある宮殿の公園のように、整然とした並木や幾何学的な模様の花壇に草花が植栽されているのではなく、自然景観を再現する公園でした。両岸が石積みで整備された直線の水路ではなく自然な曲線の水路、芝生のある丘陵ではなく地層の露出した岩山、整備された並木ではなく雑木の森林のような風景がアメリカの人々の嗜好に合致し、全国各地から設計を依頼されたのです。

公園の設計での名声は大学のキャンパス計画の依頼にも波及しました。一八五七年以後、カリフォルニア大学バークレー分校（一八六五）、セントルイス・ワシントン大学（一八六五）、ギャローデット大学（一八六六）、コーネル大学（一八六七）、バーウィック・アカデミー（一八九四）などのキャンパスの設計を依頼されています。そして父親の仕事を継承した二人の息子も多数の大学キャンパスを計画し、合計五〇以上にもなります。

さらにオルムステッドを有名にしたのは、コロンブスのアメリカ発見四〇〇年を記念して一八九三年にシカゴで開催された「コロンビア大博覧会」です。ミシガン湖畔の広大な土地に入江や運河を構築、二〇〇棟以上の建物が建設された壮大な会場を計画したのが当時のアメリカを代表するJ・W・ルート、C・B・アトウッド、D・バーナム、そしてオルムステッドでした。この企画は成功し、半年で二七〇〇万人の観客が殺到しました（図5）。



図5 コロンビア大博覧会（1893）

自然保護に尽力

しかし奴隷制度に反対であったように、正義の意識の明確なオルムステッドは自然環境保護にも尽力します。一八六五年にカリフォルニアのマリポサ鉱山で仕事をしていたとき、前年に州立公園に指定された直後のヨセミテに旅行し、アメリカで最大の落差（七三九メートル）のあるヨセミテ・フォールズ（図6）やリボン・フォールズ（四九一メートル）、セコイヤの巨木が群生しているマリポサ・ビッグ・ツリー・グローブを見物します。

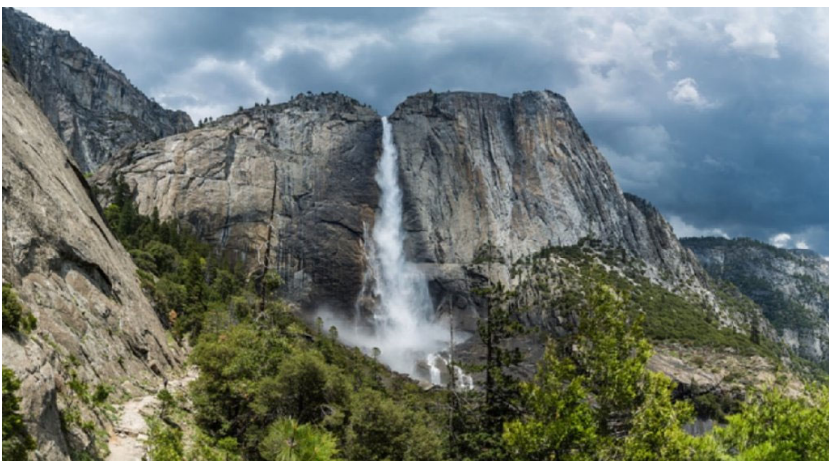


図6 ヨセミテ・フォールズ



図7 ナイアガラ瀑布

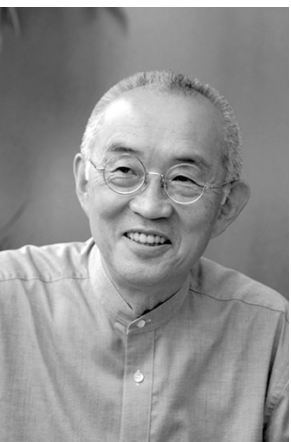
しかし、当時は林業や鉱業の企業が公園内部に進出し、樹木を伐採したり鉱石を採掘したりしていました。そこでオルムステッドはヨセミテ渓谷を公共の公園としてカリフォルニア州の土地にし、自然環境を管理するための組織を創設することを連邦議会に請願しました。それが認定されて組織が設立され、オルムステッドは委員長となって国立公園の制度の創設に尽力し、ヨセミテも一八九〇年に国立公園に指定されることとなります。

さらにナイアガラ瀑布の保全にも貢献しています（図7）。一八八〇年にナイアガラを訪問したオルムステッドは周囲に民間の営利施設が乱立し、発電施設まで建設されていることに愕然とします。そこで訪問してきた人々が自由に利用できる公共施設を整備することをニューヨーク州政府に提案します。やや時間がかかりましたが、一

八八七年に自然環境の保全を義務とする土地保護制度が成立し、営利施設を排除することに成功します。

景観建築を開拓した巨匠

次々と新規の分野を開拓してきたオルムステッドも七三歳になった一八九五年に引退を決意し、九八年にマサチューセッツのベルモントのマクリーン病院で生活するようになり、一九〇三年に死亡するまで滞在しました。遺体は故郷のハートフォードの墓地に埋葬されました。それ以後は二人の息子J・C・オルムステッドとF・L・オルムステッド・ジュニアがオルムステッド兄弟会社を設立し、一九八〇年まで父親の開拓した仕事を継続しました。名前が現在まで伝承されている最古の技師は紀元前三〇世紀にエジプトのサッカラにある段状ピラミッドを設計したイムホテップとされていますが、それ以後、建築技師は都市計画や庭園設計も実施してきました。しかし、オルムステッドは一九世紀に景観建築（ランドスケープ・アーキテクチャー）という新規の分野を開拓した最初の人間です。膨大な公園や大学の敷地計画を実現してきましたが、質量ともに偉大な人物でした。



つきお よしお 一九四二年名古屋生まれ。一九六五年東京大学工学部卒業。工学博士。名古屋大学教授、東京大学教授などを経て東京大学名誉教授。二〇〇二、〇三年総務省総務審議官。これまでコンピュータ・グラフィックス、人工知能、仮想現実、メディア政策などを研究。全国各地でカヌーとクロスカントリーストリーをしながら、知床半島塾、羊蹄山麓塾、釧路湿原塾、白馬仰山塾、宮川清流塾、瀬戸内海塾などを主催し、地域の有志とともに環境保護や地域計画に取り組む。主要著書に『日本 百年の転換戦略』（講談社）、『縮小文明の展望』（東京大学出版会）、『地球共生』（講談社）、『地球の救い方』、『水の話』（遊行社）、『一〇〇年先を読む』（モラロジー研究所）、『先住民族の叡智』（遊行社）、『誰も言わなかった！本当は怖いビッグデータとサイバー戦争のカラクリ』（アスコム）、『日本が世界地図から消滅しないための戦略』（致知出版社）、『幸福実感社会への転進』（モラロジー研究所）、『転換日本 地域創成の展望』（東京大学出版会）など。最新刊は『凜凜たる人生』（遊行社）。